

日本近代文学館

公益財団法人
日本近代文学館

一日 次一

- 〔駒場ノート〕教室と文学館
を深くつなぐ試み 坂上 弘
- 〔随想〕
世田谷線の小説を 片岡 義男
『蔵書の中から』 藤本由香里
『夏の赤毛のアン』 藤本由香里
〔夏季企画展紹介〕
教科書のなかの文学 庄司 達也
教室のそとの文学 紅野 謙介
文学の歴史を眺める 紅野 謙介
- 〔新取蔵資料紹介〕
宮田千秋氏旧蔵資料 田口 麻奈
のこと
〔その頃〕
台湾歌壇創立五十周年 三宅 教子
記念大会を終えて
〔文庫・記念館〕
琉球大学附属図書館 富田 千夏
沖縄資料室の紹介 永淵 道彦
〔短信〕

山川方夫資料受贈

山川みどり氏と坂上弘氏から、山川方夫資料をいただいた（詳細は八面「受入れ報告」に）。

教科書のなかの文学／教室のそとの文学

館展示ホールでは九月十六日（土）まで、夏季企画展「教科書のなかの文学／教室のそとの文学—芥川龍之介「羅生門」とその時代」（庄司達也編集）および「文学の歴史を眺める—小説を中心に」（紅野謙介編集）を開催する。開館五十周年にあたり、若い世代にもっと文学の面白さに触れてもらう機会を増やすため、現在すべての高校教科書で取り上げられている「羅生門」の魅力を紹介する。また、芥川の創作活動の背景として、近代の「小説」の形式が生まれた経緯を、文学史でたどる。会期中には、芥川が聴いていた音楽を蓄音機で聴くレコード鑑賞会も開催する（両展については四—五面に紹介記事）。

先生のためのセミナー

夏季企画展に関連し、七月一日、小中高校の教員を対象としたセミナー「『教室』と『文学』をつなぐ—日本近代文学館を橋渡しとして」を開催した。東京や近県から国語科担当教員など二十七名の参加があり、書庫や展示会の見学のほか、理事による教育現場の中での文学館活用法レクチャー（講師／中島国彦、安藤宏）をおこなった。また、生徒が文学への関心を深める授業の工夫や、文学館を利用した学習の可能性などについて、活発な意見交換がおこなわれた。

六月理事会、運営審議会

六月三日、定例の理事会が開かれ、二〇一六年度の事業報告と決算が承認された。出席は坂上弘理事長、池内輝雄副理事長、中島国彦専務理事、荒川洋治、安藤宏、江種満子、紅野謙介、佐藤洋二郎、出久根達郎、宗像和重、山崎一穎理事、安藤元雄監事。

全国文学館協議会総会

六月十四日、全国文学館協議会二〇一七年度総会が全国の四十七館・団体六十二名が出席して当館で開かれた。同日現在、加入館は九十九館・三団体。

第90回 声のライブラリー

日時 9月9日（土）14～16時
朗読 石田千／梯久美子
司会 佐藤洋二郎
参加料 二一〇〇円

また、六月二十四日、二〇一七年度の運営審議会が開かれた。出席は石崎等、尾崎護、川村濤、谷川恵一、東郷克美、武藤康史、山田俊治、林淑美、和田博文評議員、出野直子、伊藤一郎、今村忠純、小林幸夫、高橋博史、長谷川啓、福士千恵子、山田有策、渡邊澄子運営審議会委員、坂上弘理事長、池内輝雄副理事長、中島国彦専務理事、栗原敦、宗像和重理事。

後日、書面による評議員会決議で二〇一六年度事業報告と決算が承認されたほか、理事会から提案されていた定款の一部変更が原案通り承認された。また、任期満了にもない理事の改選を行い、現理事全員と武藤康史氏が新理事に選任された。あわせて小林幸夫氏が新たに評議員に選任された。

近年私たちは文学館のエクステンション活動を、さまざまな角度から積み重ねてきた。講座「文学館演習」「資料は語る」「声のライブラリー」「文学館へ行こう！」などで貢献してきたが、今年度からさらに、開館五十年を期して、新しい企画をはじめ。それが「教科書のなかの文学／教室のそとの文学」というテーマの展示と「教室」と「文学」をつなぐ」というセミナーの組合せである。

高校の先生と高校生を迎えるので、これまで入館者の年齢制限（閲覧室利用）を十八歳から十五歳に下げることに変更した。これも当館の開館五十年を期した新たなすがたで、取材に来られた東京新聞（六月十二日夕刊）が「研究型から貢献型へ」という見出しをつけてくださった。

まずこの展示では、高校生が教科書で学ぶ文学作品を、原稿や発表誌、作品をめぐる書簡などの生きた資料で楽しみつつ、言葉の本質にふれていただく機会を提供する。そして、セミナーでは、先生方に教材を豊かにする様々な視点からの議論をしていただき、教室で活かしてほしいと思っっている。文学の深みへ。若い世代の言語文化を、豊かにしていただくとう願うのである。

七月一日に行われた第一回のセミナーは、三十名の教員・大学院生が参加して、熱のこもった意見交換会になった。展示では、教科書に採用されている芥川龍之介「羅生門」の、作品誕生の秘密から反響までのかげがえのない資料が示され、セミナーでは講師の中島国彦、安藤宏両氏とともに私も聞き入り、熱意に打たれた。参加者の皆様の声をうかがうと、国語教育の現場に役立つことを、私たちは出来るところからどんどん対応していきたいと思った。

〔駒場ノート〕③ 教室と文学館を 深くつなぐ試み

坂上 弘

「羅生門」の、作品誕生の秘密から反響までのかげがえのない資料が示され、セミナーでは講師の中島国彦、安藤宏両氏とともに私も聞き入り、熱意に打たれた。参加者の皆様の声をうかがうと、国語教育の現場に役立つことを、私たちは出来るところからどんどん対応していきたいと思った。

（館理事長）